
ある日の放課後

蕪穢賛歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の放課後

【Nコード】

N5549M

【作者名】

蕪穢賛歌

【あらすじ】

主人公・白川木月は放課後をダラダラ過ごし、暇を持て余していた。

そんなとき、期末テストが間近に迫り、勉強をしていなかった木月は欠点を取ってしまう。

悲しみに溺れていた白川は仕方なしに補修室に向う、そんなとき学校で一番、ゴツイ男

愛称・ソードと呼ばれている筑谷剣二に出会うのだった。

それは忘れもしないある放課後のことだ

俺が補修で居残りになっていたときの事だ

ああ・・・疲れたな今日は7限だったからな・・・しかもこれから補修か

ふとこちらをみるとソードが立っていた。

「今日もかつこいいね」

なにを言うんだこの人は・・・そう考えているとソードはこう口にした

「俺様と付き合わないか？」

「俺は補修があるから今日は無理だ」

この事は真剣に考えている成績最悪な俺が補修で何とか上がれているのもたしかだ

「そういうなよ俺はお前の事が前から好きだったんだ!!!」

「俺は今から補習だししかも俺はお前のこと知らないし。何いきなり愛に告白してるんだよ!」

俺はそう聞き返してみた。

「補習とかサボれよ。」

「俺様なんか補習受けなくても上がったんだから」

「お前は数学と理科で何とかなるだろう?でも俺はそんな切り札もないんだぞ?」

はつきしいって俺は低能だこのまま補修に行かなかつたら上がれなくて留年かもしれない

その危険性を考えてはいるが・・・このソードはそんなこと尾構え無しなのだ・・・

しかもそのあとにソードはこう言った・・・

「数学と理科はわかるけどそれ以外は俺様も無理だ。」

「だからさあ一緒にデートしようぜ月ちゃん」

俺は補習に行かなければ行けないが。はっきりいってソードも気になるまたほつといたら何を
しでかすかわからない。

「ああ・・わかったよ。」

「いくよ」

俺はそういつたしかしなんで俺なんだ？俺はそう疑問に思ったので
ソードに聞いてみた

「お前の以外考えられない」

といきなりソードは叫びやがった・る生徒もいるんだぞ・・・」

俺はそう言つと

「そんなの知らないぜ」・・

「なんで叫んでるんだよ？」

「ここにはまだ補習に居残りしてい

勝手なヤツだなつくづく思う。しかも初対面のヤツに言う台詞か・

・ああ

そう考えているとソードが言った。

「今から付き合え。デートだ！場所は驚天動地広場だぜ！」

「なんであそこなんだ？あそこはカップル御用達じゃないか？」

俺は疑問に思いそう聞いていた

「それは俺とお前は一心同体いわば。カップルだからだぜ！」

ハア！と俺は溜息を付くようにソードを睨んでやった

「まだいかないのか？」

「なんでだ？」

どうしてなのか気になってしかたがないから俺はこういう対応して
普通のはずだ

そう思っているとソードがこう口走った。

「まだ、俺様の親友が来ていないから」

うん？それってデートじゃないよな？俺は不審に思った、何を考え
てるのか理解不能だ

「親友か？もしかして切齒宵春の事か？」

「「」名答」

そうソードが不自然な笑みを漏らして言った

「それにしてもなんで闇なんだ？」

ややこしくなるから説明しておく。この闇とは宵春の内気な性格からついたあだ名だもちろん。この俺でも知っている学園中では知らない人はいないほどだ

「闇か・・・お前は闇とが中良かったのか？」

「そうとも俺と闇は中学の頃から親友同士だが知らないのか？」

「知るわけないだろうが！」

やっぱりこのソードはおかしい。自分では優しいと思ってるがそうとは思えない所謂、自称だと俺は思うことにする。

「でも、なんで。闇が必要なんだ？」

「もしかしてラブルデートか？」

正直のところ俺もデートなんかに行きたくないしかしソードを怒らすとあとが怖いと噂があるから

何も言わないのだ・・・

「驚天動地広場までは何で行くんだ？」

「もちろんな！俺がお前を自転車の後に乗せてつれつてやるよ。」

「なんだよそれ？まるで俺が彼女みたいじゃないか？」

俺は怒りを交えた口調で言った。

「はぁ？お前こそなに言ってるんだよ俺様と月はもうカップルになっただろう？」

「俺はそんなの認めてない・・・」

「俺が愛しているのは美少女だけだ」

「美少女ね・・・」

そう言うのと哀れな目で俺を見てきやがった・・・むかつくやつだな話しているうちに驚天動地広場についた。

「到着だぜ」

満面の笑みでソードがそう言った。俺も続くように

「だな・・・」

ふと見ると軟弱そうな男が見える・・・闇か・・・

「よう。闇、お前も来ていたのか？」

そう、馴れ馴れしく挨拶するソード、はつきし言っただけの光景が腹立つの俺だけだろう。何せ友達がいないうちだからな。最年長だ

「こんにちは初めまして。白川木月と言います。」

「あつ・・・こんにちは。」

丁寧じゃないが。闇はお辞儀をした。

「よう。闇じつはこの俺様と月はもう友達同士なんだよ！」

「すごつ・・・」

と闇は言った。

「違うよ」

俺はそれに続けて違うよと言っただけで、俺が友達と認識されているはずもない

しかもこのソードには必ず裏があると俺はそう説いた

「それで。どこ行くんだ？」

と俺はもう一度訊き直した。

「お前の家に決まってるじゃないか？」

「ハア？俺の家か？」

俺は仰天した・・・最初とっている事が違うだろうが・・・

漸く。わかったこのソードは俺を最初から騙していたのだと。

「それで何するんだよ？」

俺は啞然とした表情で訊いてやった。

「もちろん。ベッドで二人で寝ようと思っただけ！」

「なんでベッド？」

俺は仰天した、俺は友達を家に連れ来るのは初めてだしましてや。

そんな事は許してもらえないだろう・・・何せ俺の母親の知は知らない客

(学校の友達すら信じられない極度の疑心を抱いているからだ)

そんな母親に友達ですなんて言ったら俺も追い出されそうになりかねない。」

「厭・・・家は無理だゴメンナ」

と言うとソードが怖い顔で睨んできた

「なんでだ？」

「僕は別にいいよ」

闇はつぶらな瞳でそうい言った・・・

(闇お前は良いやつだなとつくづく思う)

「家に入れないと打ん殴るからな」

ソードがまた怖いことを言う。俺じゃどうしようもならない・・・

闇はよしとしてソードが危ない・・・そう俺は悟った

「とりあえず、家に連れて行くから・・・殴らないでくれよ」

俺はそう訴えるように言った。

「それじゃいいぞ」

ソードが笑顔で笑った・・・

「ふう・・・」

ん？なんでお前が溜息をつくの？

「殴られるかなと思って・・・」

お前じゃなくて俺がな。この闇は自分が殴られると思っていたよう

だどんなけ

内気なヤツなんだよ・・・

「ただいま！」

と家に帰宅すと知さんが迎えてくれた・・・

「おかえりー」

「今日は補習あつたんじゃなの？」

とそう訊かれた。でも俺の悪知恵を働かせ、嘘をついた。

「今日は補習の担当の先生が倒れて救急車で運ばれたんだ・・・」

「ふーん」

と知さんは頷いた、めんどくさいから説明しておくがこの俺の母親

も勉強がまったく出来ない低能

だ、しかし料理の腕は三流のコックより上だから驚きだ。

「お邪魔するぞ」

ソードが命令口調でそう言ったまったくこの人はどこまで強がりなんだろうか？

「お邪魔しますね・・・」

上品に頭をさげて入る闇、お前もこいつみたいにしるよと思うほどだその瞬間だっ！アッー！と言っ悲鳴が聞こえた。

何だろといっってみると、なんと闇が掘られていた！

しかも、ソードは笑顔でこう言った。

「闇は、俺に惚れたんだよ。」

ノムノムとか言ってきた。めんどいから逃げることにした。

しかし、走るのが速いためか、俺のファーストキスを男に奪われた…

もう仕方がないと思っ、二人で掘りあつた！そして三人の悲鳴がする。

すると掘られた瞬間に闇が消えていた。あたりを探し回つたが、ど

こにも

いない、もしかして、神隠しかと思つた、案の定そうだつた、そうしてる

間にソードに掘られた！アッー！そして俺も消えた。

ソードだけ残りあとは、苛立つたソードが世界崩壊ボタンを押した。

そして、別の世界で…と言っ残し、さつて言つた。その瞬間この世界は

なくなつていた。

「BAD…END」

オマケ

これは夢だつた。EDを聞いているとがちむちのなく頃のEDだつた。

歪見沢村か…と思つた、そして俺はホルホルコミック

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5549m/>

ある日の放課後

2011年1月20日04時45分発行